

2022年10月18日(火)【外為Lab】松田哲
タイトル:【果たして、「介入」があるのだろうか?】

前回の介入(=ドル売り円買い介入)は、先月の9月22日(木)だった。

この日(2022年9月22日)は、翌日が「秋分の日」で休日。

週末の金曜日に、東京外国為替市場が休場になることを懸念したことも、「介入」を実施した理由の一つなのかもしれない。

9月22日の「ドル売り円買い介入」は、「145.80-90水準」で始まった、と推測できる。

そして、ドル/円的水準が下落するにつれて、その都度、断続的に実施したのだろう、と推測できる。

9月22日のドル/円の安値水準が、140円台であることを踏まえると、この「介入」で、約5円下落させる効果があった、と言える。

++++
++++

現状のドル/円は、すでに、前回の介入水準(=145.80-90水準)を上突破して、本日(2022年10月18日)、149円台(=149.00アラウンド)を示現した。

このところのマーケット(外国為替市場)は、前回の介入水準(=145.80-90水準)になると、介入警戒感が強まり、小幅に下落することも散見されたが、結局のところ、介入がなかったことで、高値を更新して、146円台を付けた。

146円台を示現すると、さらに介入警戒感は強くなるのだが、じりじりと上昇を続けて、147円台に乗せた。

147円台に乗せると、少し上昇のスピードを上げて、本日(2022年10月18日)、149円台(=149.00アラウンド)を付けた。

++++

現状の値動きから考察すると、もう一段上昇して、150円を突破しても、全く不自然ではない、と思料する。

ただし、もちろん、再び、「介入」が実施されるならば、前回ほどではないのだろうが、ドル／円は、大きく急落するに違いない。

しかしながら、果たして、「介入」があるのだろうか？

++++
++++

今、多くの市場参加者は、

「是非、介入（＝ドル売り円買い介入）をして欲しい」

「そうすれば（介入があれば）、安値で買えるから」

と、「介入」を待っている状態、と推測します。

++++

こういった状況だと、マーケット（外国為替市場）全体では、ドル／円の「買い持ちポジション（＝ロング・ポジション）」は、溜まり難い。

つまり、誰しものが、ドル／円の「買い持ちポジション（＝ロング・ポジション）」を、作り難いし、そして、それを持ち難い（＝キープし難い）。

++++

そして、仮に、「介入」が行われても、多くの市場参加者が、下がったところで、ドル／円を買おうと待ち構えているので、前回（2022年9月22日）の介入のように、大きく急落するとは限らない、と考えます。

++++
++++

さらに、「介入」が実施できるか、否か、には、米国が容認するか、否か、という障壁がある、と考えます。

換言すれば、日本が「介入」するには、米国の事前了解が必要、と推測します。

バイデン大統領が、現在のドル高を容認する発言をしています。

なおかつ、バイデン大統領は、

「問題は、他国に経済成長や健全な政策が欠如していることだ」

として、米国よりも、それぞれの国に原因がある、と述べています。

つまり、バイデン大統領は、基本的には「為替介入」を否定する立場である、と考えます。

++++
++++

(2022年10月18日東京時間14:05記述)